

PBL

Project-Based Learning

推進支援センター通信

VOL. 16



2017年度秋学期成果報告会の様子

同志社大学PBL推進支援センターでは、PBLの普及と発展のために、多様な実践を通して見てきた課題や可能性について議論を重ねてきました。その成果をシンポジウムや教育フォーラムとして公開してきました。

今回は「ワーキング・コモンズとラーニング・コモンズ ～意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か～」と題し、働き方と学び方の根底にある「学び」の本質を問い直すというテーマのもと開催したシンポジウムを特集しています。「コモンズ」についてPBLの視点から改めて見つけ直し、高等教育だけにとどまらず、働き方にも通じるアクティブな学びについて問い直すきっかけになればと考えています。

ワーキング・コモンズとラーニング・コモンズ ～意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か～

同志社大学PBL推進支援センター長
文学部教授 山田和人

大学ではアクティブ・ラーニングと関連づけてラーニング・コモンズの設置・運用が進められている。高等教育におけるアクティブ・ラーニングの学習環境は何を目指し、いかにあるべきなのかが問われている。ただし、こうした問いは大学教育の範囲におさまるものではない。社会に目を移すと、働き方改革が話題になり、そのために職場環境の整備と活用が推奨されている。働き方改革と学び方改革とがパラレルにある今こそ、両者の根底にある「学び」の本質を問い直す必要があるのではないか。そこに高等教育におけるアクティブ・ラーニングのひとつの答えがあるのではないか。そうした問題意識をもって、今回のシンポジウムでは、大学と社会に共通するプラットフォームを探る試みとして、再度「コモンズ」のあり方を問い直した。

平成28年度学術情報基盤実態調査(文科省)では、全国の大学の過半がアクティブ・ラーニングを推進するために、アクティブ・ラーニング・スペースを設置しており、多様な空間やコンテンツとともに大学院生や図書館員、教員などによるサポートを不可欠としている。このように大学では、従来のラーニング・コモンズとラーニング・スペースという言い方が併存している。それに対して、職場では、ワーキング・スペースという言い方が一般的であり、ワーキング・コモンズという用語自体がない。実は「ワーキング・コモンズ」はわたくしの造語である。なぜ、そうした造語を作ったのかといえば、ワーキングにもコモンズが必要な

ではないかという問題意識があったからで、われわれが今問題とすべきなのは、「スペース」なのか、「コモンズ」なのかを問いたかったからだ。それはラーニングにとっても、ワーキングにとっても共通認識を持っているべき問題なのではないか。大学と社会(職場)をつなぐ場として、コモンズを設ける必要があるのではないかと思ったからだ。

本来、コモンズとは共同利用地を意味するが、そこには多様な人と物、それらを活かす空間があり、それらを受け入れる環境がある。多様な価値観、世界観を認め合う思想が根底にはある。誰もがいつでも使えるスペースではなく、さまざまな価値観を持った人が集まり、ともに活動することによって新たな価値を生み出していくコモンズこそが求められている。それを見失うとラーニングのための快適さだけを追求するスペースになってしまう。そこに集まる人も、自らの目標や目的を持たず、モチベーションが低くなる。それでは新しい価値を生み出す創造的な学習空間ではなくなる。

いままさに、ラーニング・コモンズの意味を問い直す時期が来ている。それはとりもなおさず、社会(職場)でワーキング・コモンズを創造し、大学と社会を結ぶプラットフォームを模索する道であり、人生を豊かなものにしていくために、学ぶことは働くこと、働くことは学ぶことという長期的な学びへの誘いとして、文字通り生涯学習としてのPBLのあり方が問われるのかもしれない。

PBL推進支援センター主催シンポジウム ワーキング・commonsとラーニング・commons ~意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か~

大学事例報告



学校法人石田学園 副理事長
広島経済大学 副学長

石田 優子 氏

【プロフィール】

2008年より副学長、2017年より副理事長。経済学部准教授として教壇に立ちながら、大学運営にも尽力し、人間力を身につけるための教育プログラムの開発や初年時教育など教学分野の改革をはじめ、学びの環境の整備にもかかわる。2016年末に完成した、アカデミック・commons「明德館」(ラーニングcommonsを備える)の建設構想に当たってはリーダー的役割を果たした。

【知的好奇心を刺激する、新たな学びへの挑戦 —アカデミック・commons「明德館」の完成—】

2016年の冬、広島経済大学にアカデミック・commons「明德館」が完成した(以下、明德館)。建設期間約2年、総工費約48億円、地上10階建て、まるごとすべてが学生たちの自由なアイデア創造空間だ。100人規模のプレゼンを可能とする円型コート、学生が自由に学び場を創ることができる可動式の机や椅子、学びが深まるボックス席や、ガラスのディスカッションルーム、リラックスできるカフェなど多彩なエリアを備える。壁や仕切りを極力排し、仲間の学ぶ姿を目の当たりにすることで、互いに刺激があり、自らを研鑽できる空間とした。さて、commonsについては設置後、どのように運用するかが課題だ。利用者である学生や教員のニーズをつかみながら、運用のルールを合わせていくことも必要だ。また特に、授業を通じた利用の促進が重要なカギになる。アクティブラーニングの場合、教員も学生とともに学び方を考えたり、課題の解決を考えたりできる。そうした人間同士の信頼、関わりの中で学生が成長することも大いに期待できる。commonsでの学びを通じて、知識、プレゼンテーション能力、人間力を養い、多様な人々と協力して社会を支え、未来に貢献できる若者としての成長を後押しする。



同志社大学 学習支援・教育開発センター 准教授

濱嶋 幸司 氏

【プロフィール】

アカデミック・インストラクターとして、良心館ラーニング・commonsに常駐。学生からの学習相談およびアカデミックスキルセミナー(授業外学習講座)を担当。専門は、教育社会学、学生文化・青年文化研究、学生支援論。最近は授業外学習施設の利用学生の学習成果を調査データから解析・報告している。新潟大学で学生支援を担当、立教大学で教学IR担当を経て、2014年度より現職。

【良心館ラーニング・commonsの現状:学習空間と学習支援】

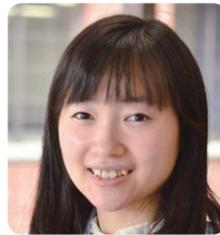
2013年4月に開設した良心館ラーニング・commons(LC)の現状を5つ(①LCとは?②何を狙って企画・設置したのか、③学習空間の現状、④学習支援の現状、⑤おわりに)から報告する。

①と②ではLCの理念、設置の経緯と現在の運営体制を紹介する。学生の授業外学習を促すために各エリアを設定し什器・備品の配備と人的支援を兼ね備えた施設となっている。

③と④では5年間のLC利用状況を紹介します。学期期間中の平日利用者が延べ2000名を超える、時間帯によって利用者の人数に変動がある、予約が必要なエリアも稼働している、学習相談において多様な内容が寄せられている、アカデミックスキルセミナーは学部との連携を取っている、利用者への調査から学習成果を多面的に把握している等々、例示する。

⑤ではLCにおける学習空間と学習支援の現状と課題に触れる。成果を踏まえつつも課題は存在する。事例をもとに学習空間と学習支援を持続的に管理運営できる体制の必要性を提起する。

最後に2018年4月から京田辺校地ラーネード記念図書館内にLCが開設されることにも触れておく。当LCの理念を踏襲し、加えて京田辺特有のニーズに対応した運営を目指す。



同志社大学ラーニング・commons
ラーニング・アシスタント

矢内 真理子 さん

【プロフィール】

同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程在学中。修士(メディア学)。福島原発事故とマスメディアの報道をテーマに研究を続けている。2016年度から同志社大学ラーニング・commonsのラーニング・アシスタントとして学習相談に対応している。8年間のティーチング・アシスタント(TA)経験をもとに、2017年度同志社大学学習支援・教育開発センター主催のTA研修会に登壇。高等教育と大学院生のキャリア形成にも関心がある。

【大学院生が学習相談にのる意義】

ラーニング・アシスタント(以下LA)とは、ラーニング・commonsの中にある学習相談エリアで、学部生・院生の授業外学習のアドバイスを行う大学院生のスタッフのことを指す。2017年度はそれぞれ異なる専門分野を研究している11人が在籍している。

LAというシステムの目的は、第一に学生の研究・勉強の悩みを解決する手助けをすること、第二にLAの教育経験を積み場として機能している。LAの意義を大学生の人間関係からみると、大学の中では同級生や先輩・後輩、先生といった人間関係が生じるが、その学部・院にどんな人がいるのか、何年生からゼミが始まるのか、部活などのコミュニティに属しているかなどの要素が関係しており、個人差がある。LAは学生にとって、M.グラノヴェッターが言うところの「弱い紐帯」であると考えられる。学生の人間関係では得られなかったかもしれない情報を補完する存在がLAであるといえる。LAは学習相談の場において、成績評価と関係がない場を提供する。そして相談者と年齢が近いことから共感を得やすい。こうした部分が「弱い紐帯」であり、先輩でもあり、教員の卵でもあるLAが学習相談を受ける意義であると言える。

企業事例報告



パワープレイス株式会社
プレイスデザインセンター長

濱村 道治 氏

【プロフィール】

環境デザインを学び株式会社内田洋行に入社。2003年空間設計部門の分社化に伴いパワープレイス株式会社へ転向。1980年代旧通産省が提唱した「ニューオフィス推進化」黎明期より企業、団体のオフィスデザインを手掛ける。2000年以降は大学のアクティブな「学び」とオフィスの創造的な「働き」のシームレス化に着目。大学のラーニングcommonsにオフィスデザイン手法を応用するなど「学ぶ場」「働く場」を問わずデザイン活動を展開中。

【「働き方改革」の改革!?!~それでも人はなぜカイシャに行くのか?~】

最近、巷で「働き方改革」をよく耳にする。しかしこのワードは過去から経営課題として取り上げられてきた普遍的なテーマである。世間一般に広く浸透してきた今こそ確実な成果を推進できればと考える。ただし、「働き方改革」の本質は政府や企業経営陣がトップダウンで行う施策ではない。その為にも「変革」に対して働く現場でチャレンジ出来る内容である事、自己や家族、社会全体、そして企業や団体にとってどんなメリットをもたらすかを自分事として捉えることが重要である。加えて社会に飛び出そうとしている学生達にとっても賛同でき、近未来の働き方を示唆できるものでなければならない。私達パワープレイス社は10年ほど前から大学での「学び」と実社会での「働く」をブリッジに架ける事にチャレンジしてきている。このテーマを現実味あるものにしていくのは「働く」と「学ぶ」の両者に存在するクリエイティブな思考を醸成する事だと考えている。第一線で働く人達と学生が共に語り合うサードプレイスの協創空間を提供する。そして、そこが出会いの場となり新たな境地を切り開き、働き方の未来を創り上げていく。これも改革の一つの姿だと考える。それを実現するのも実社会で働く我々の使命であると強く感じる。



ココヨ株式会社 ワークスタイル研究所 研究員

樋口 美由紀 氏

【プロフィール】

ココヨワークスタイル研究所に所属し、リサーチに基づいた社内外への講演活動に従事。人材育成、ウェルビーイングを切り口としたビジネスパーソンの働く現場からシニアのキャリアデザインまで、幅広い領域に関心を持っている。最近の主な講演テーマは「企業も社員も幸せになる「ウェルビーイングな働き方」」「世代や性別の壁をどう乗り越える?~新たな視点からみるこれからのワークスタイル~」など。

【知的創造を促すオフィス空間とワークスタイル変革】

いまワーカーの働き方に新しい変化の兆しがみられています。その背景にあるのは「知識基盤社会と人生100年時代」の到来。今までにない新しい価値を生み出すには個人や組織の知的創造力が重要であること、個人が学び続けながら、キャリアや人生のポートフォリオを主体的にデザインすることが求められる時代になったこと等が言われています。

こうした状況は、企業とワーカー個人の双方から働き方改革を求めるニーズに結びつき、オフィス空間においてもその流れを後押しする新たなチャレンジが始まっています。その特徴は、様々な壁を取り払って個人が自由に働き、他者と出会い、交わることで新たな価値創造を促そうとするものといえます。コワーキングスペースや最近注目を集めているフューチャーセンターなどは枠を超えたメンバーが交わり、知を創発する場として今後ますます広がっていきそうです。今日の企業では、オフィス内外含めワーカーの働く場全体を知的生産の場としてcommons化する志向性をもった空間づくりが進みつつあるといえるかもしれません。

また、働く時間や場所の自由化や、働くシニア、子育て社員の増加など、今後オフィスは多様な人々が必要に応じて利用する場となってくるでしょう。さらに、ワーカーの自律的な成長を促す複業など新たな学びスタイルの登場もあり、従来ない働き方・学び方をオフィス空間はどのようにサポートできるのか、これらは今後の課題です。

新たな知識創造を目指した、そして、さらに進む多様な人の多様な働き方に適した理想のオフィス空間の実現は、まさに進行形のテーマ。こうした課題をたゆまず追及してこそ、知識基盤社会の中で、個人は自律したワーカーとして学び成長することができ、組織は新たな価値を生み出し得るものへと発展することが可能になると考えています。

シンポジウム開催報告

3月2日、今出川キャンパス良心館103番教室において、PBL推進支援センター主催シンポジウム「ワーキング・commonsとラーニング・commons ~意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か~」を開催しました。当日は全国より100名を超える皆様にご参加いただきました。

第1部は濱村道治氏(パワープレイス株式会社)、樋口美由紀氏(ココヨ株式会社)より企業事例報告があり、第2部は石田優子氏(広島経済大学)、濱嶋幸司氏(同志社大学)、矢内真理子さん(同志社大学)より大学事例報告がありました。第3部のパネルディスカッションでは第1部、第2部の登壇者がそれぞれの視点から議論を展開し、会場からの活発な質疑も含め、改めて「commons」を問い直す貴重な機会となりました。



2017年度プロジェクト科目 秋学期関連事業開催報告

◆2017年12月1日(金) 秋学期プロジェクト・リテラシー講習会

パワープレイス株式会社濱村道治氏を講師に迎え、「伝えるちから～ポスターセッション」と題してプロジェクト・リテラシー講習会を開催しました。

2017年度2回目となる今回は、思考のプロセスや成果の妥当性をわかりやすくポスターに表現し、伝えるためのスキルを伝授していただきました。実際に春学期の成果報告会で見られた「良くない」セッションを講師陣がデモンストレーションした際には、履修生たちから笑い声がもれながらも、「自分たちもこのようなセッションをしてしまっていたかもしれない…」と気付かされる点も多かったようです。その後、グループに分かれてポスターに必要な最低限の構成要素や表現を学びながら実際に短時間でポスターを作成し、模擬ポスターセッションが行われました。参加した履修生たちからは、成果報告会に向けての意気込みが強く感じられました。



◆2017年12月18日(月) 秋学期履修生懇談会

◆2018年1月27日(土) 秋学期科目担当者・代表者懇談会

履修生懇談会では、各プロジェクト科目の履修生代表が一堂に会し、まず、1年間の活動を通してそれぞれのプロジェクトでどのような成果が出たのかについて報告が行われました。春学期の懇談会に比べてプロジェクトの成果についてより具体的に、自分自身の言葉で話している様子が印象的でした。次に、秋学期成果報告会で1年間の活動をどの程度客観的に評価できるかについて意見交換が行われました。多くの履修生が積極的に発言し、自分たちのプロジェクトのユニークな点などをアピールしている様子が見られました。成果報告会で発表する前段階のプロセスとして活発なやりとりが行われ、履修生にとって有意義な意見交換の機会となったようでした。また、科目担当者・代表者懇談会では、初めにプロジェクト科目検討部会会長 山田和人教授から秋学期成果報告会や授業アンケートに関する報告、説明が行われました。次に、各担当者・代表者から今年度の授業運営に関する報告や、成果報告会を終えての感想が述べられました。後半はSA/TAの役割、および企画書のあり方を議題に意見交換がなされました。忌憚のない意見や提案が飛び交い、活気のある懇談会となりました。



◆2018年1月15日(月) 第3回SA/TA協議会

各クラスに1名ずつ配置しているSA(スチューデント・アシスタント)、TA(ティーチング・アシスタント)が集まり、第3回目の協議会を開催しました。今回は、それぞれのプロジェクトを振り返ってみて、あの時点でもっとこうの方がよかったのではないかと振り返り、互いに報告し合いました。また、履修生がプロジェクトを進めて行く上で、SA/TAがどのように関わってあげればいいのかという難しい問題についても意見交換がなされました。プロジェクトメンバーが自分たちで具体的な目標や期限を決めなければいけないという状況で、計画性を持って進めることができなかったプロジェクトも多く、SA/TAがどの程度アドバイスをすべきか悩んだという意見も多く聞かれました。反省点と同時に今後改善すべき点が明確になり、実り多い協議会となりました。



◆2018年1月21日(日) 秋学期成果報告会

今出川校地良心館ラーニング・commonsにて、秋学期成果報告会を開催し、春学期・秋学期連続科目11クラスの履修生が、活動の成果をまとめたポスターをもとに最終報告を行いました。

当日は、京都のみならず他府県からも企業や教育機関関係者、過年度履修生、授業協力者、保護者の方など約190名の参加があり、盛況を博しました。ポスターの前で積極的に聴衆に呼びかける履修生の姿からは、自分達が取り組んできた活動や成果を伝えようとする熱意が伝わってきました。春学期の中間報告時と比較して、ポスターの完成度も高くなっており、またポスターセッションにおいても、聴衆者との活発なやり取りが会場の随所で見られました。審査員からも、ポスターセッションの姿勢や内容に対しては高く評価されました。また、目的の背後にある問題・課題に対して、メンバー間で意識的に共有できていたことが着実な成果に結びついたとの称賛の言葉もいただきました。しかし同時に、企画の考案段階において問題をもう少し掘り下げるのが企画の充実に関わるのではないかと、更なる進境を期待する声も聞かれました。終了後は、メンバー同士で1年間の努力を互いに称え合う、晴れ晴れとした履修生の姿が印象的でした。



- 最優秀賞:西陣のモノづくり産業の見える化と交流促進を通じた地域活性 (今出川校地開講、春・秋学期連続科目)
- 優秀賞:留学生と創る!「京の職人文化読本」(錦市場などを中心に) (今出川校地開講、春・秋学期連続科目)
ラジオで発信一若者と高齢者の音楽イベント制作 (今出川校地開講、春・秋連続科目)
クラシック音楽のコンサートを創ろう! (今出川校地開講、春・秋連続科目)
- 特別賞:テーマパーク利用者の利便性向上に関する企画立案プロジェクト (京田辺校地開講、春・秋連続科目)



プロジェクト科目とは?

2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方向的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、受講生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。

山田センター長のつづやき



同志社大学PBL推進支援センターの山田和人センター長によるコーナーです。

大学で学ぶ一番の喜びは、他者とともに学ぶことであり、成果をひとつのかたちに仕上げ、他者にささやかでもよい、伝えることができた時の感動にある。ひとりで学び、自ら視野を広げて、ひとつのことを追求していくことも尊い。だが、それだけではおもしろくない。他者との出会いが自分を深化させる。

～山田和人センター長 Twitterより抜粋～